

---

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

第65号 2019年9月 発行

日本口承文芸学会

〒168-8508 東京都杉並区大宮 2-19-1

高千穂大学 立石展大研究室

Tel 03-3317-4077 (内線3421)

FAX 03-3313-9034

E-mail info@ko-sho.org

---

## 学問と学会の継承

立石 展大

1977年設立の本学会も、40年を超えて半世紀へと歩みを進めている。人文系学会が退潮気味の時勢においても、300名の規模を維持できているのは、ひとえに会員一人ひとりの学会への思いのお蔭である。今年の大会は沖縄国際大学での開催であった。3度目の開催であったが、あえて今年の開催となったのは、狩俣恵一先生がご定年を迎える前にと呼んでくださったことによる。学会において、沖縄での口承文芸研究の灯を消さないためとの思いに感謝ばかりである。多くの学会員にとって遠方と感じる開催場所であったかもしれないが、大会は盛会となった。地元新聞での宣伝を始め、事前に周到なご準備をいただいた。沖縄の新入会員も得られ、これからの学会の歩みに、力添えをいただけたことがありがたい。

一方、1993年度と1994年度に会長をお務めくださった飯倉照平先生が、この7月24日に逝去された。数年前に学会からは身を退かされていたが、中国口承文芸研究や南方熊楠研究の大家であった。私も昔話の日中比較を研究しているため、勉強させていただき、個人的にもお世話になった。ご論考を読むときには、今も飯倉先生のお声やはにかんだような笑顔が思い浮かぶ。先達の思いを受け取り、継承していく時に、その人柄や思い出は、どこか温かさを添えてくれる。感傷的かもしれないが、お世話になった感謝が、研究を支えてくれる。

恩師である野村純一先生が、かつてご自身を「駅のプラットホーム」に例えていらっしゃった。ご自身の指導から出発して、学生それぞれが自分の研究へ邁進するようとのエールを込めて。大学院時代、ある学会発表で、野村先生の説を否定したことがあった。しかし野村先生は発表前日の懇親会の席で「師匠に楯突いて」と笑いながら私を紹介してくれて、しかも私の論を認めてくださった。先生の懐の深さに感謝しきりだった。学生が自立して研究できるように道筋をつけてくださったその思いが私の研究の出発点になった。

学会はあくまでも器に過ぎないが、共感も批判も様々飲み込んで、一人でも多くの会員の思いや考察が交わる場所でありたい。浅学の身で会長を引き受け、恐縮至極であり、会員一人ひとりのご助力を願うばかりである。  
(東京都)

## 追悼

### 飯倉照平先生を偲んで

木之内 誠(東京都)



飯倉照平先生が、今年7月24日、骨髄異形成症候群により、85歳で亡くなりました。12年前の会報に飯倉先生が追悼文を寄せた伊藤清司先生と同じご病気でした。昨年、ご自宅での長い介護の末に、奥様とご次男を相次いで亡くされたことに、やはり大きなショックを受けられていたことでしょう。

飯倉さん(先生と呼ぶより、「飯倉さん」のほうが、門下の私たちにどうしてもしっくりくるのです)は、口承文芸学会の会長を1993年春から2年間務められました。6月の都立大学での大会の準備に始めて、会長のカバン持ちとして、ふつつかな幹事役をなんとか2年間、私が務めさせていただくことになりました。そもそもほとんど門外漢に近い私は、門前の小僧にもなれませんでした。その後もご一緒した全国各地の学会大会への何度かの旅の思い出は、今も色あせずに残っています。

金沢、那覇、札幌、遠野、弘前・・・と年ごとに、行く先々の街でたとえ初めての限界でも、夜ごとほんとうに外れなく、いい飲み屋を見つけだす飯倉さんは、酒場めぐりの達人でした。あの柔らかい温かみのある、また少し照れてはにかんだような、飯倉さんの声がいまも聞こえてきます。酒を楽しみ、語らいに興じ、人を愛し、時にはふざけて若い連中の前でちょっとだけハメをはずして見せたりもした飯倉さん、私もいつかまた先生のお話を聞けるのでしょうか。

この6月には、石井正己先生のご尽力を得て、最後となった著書『中国民話と日本 アジアの物語の原郷を求めて』が、勉誠出版から刊行されたばかりでした。最後にお宅にお見舞いにかがったときも、その原稿を手にも、なお書き残したことを、書けなかったことを、私たちの前で熱く語り続けていた飯倉さんでした。この本の解説にある石井先生のご指摘に、私は思わず膝を打ちました。飯豊道夫先生が飯倉さんの文章について、「しなやかな、しっかりとした筋が通った文体という感じで、多分これは飯倉さんの生き方がこういう呼吸で表れているのではないか」と評された言葉を受けて、石井先生は、「平明な文体は編集者と研究者の往還から生まれたに違いなく・・・」と述べられています。

出版社に就職し、大学の助手に戻り、また岩波の編集者から国立大学の教員となるも、師の竹内好を助けて雑誌編集に携わり、さらに南方熊楠全集の校訂者を経て、都立大へという、「編集者と研究者の往還」のキャリアは、学生の頃何度うかがっても覚えきれませんでした。でも飯倉さんらしいそんな「しなやかな、しっかりとした筋が通った」生き方は、あの頃の教員・学生へだてなくいつも飲んで語りあった日々の「呼吸」を通して、年若い私たちにもいつしか確かに感じ取られていったものだったのでしょうか。学者・学界の権威を嫌って、そうしたものから終始ご自分を遠ざけようとした飯倉さんの、あくまで「民」のひとりとしてであろうとする立ち位置は、生涯ぶれることはなかったのだと、いま先生を偲びつつ思っています。

2019年3月10日(土)に國學院大學渋谷キャンパスにおいて、第76回研究例会「災害の中の日常」が開催された。司会は中村とも子氏。パネリストは川島秀一氏と花部英雄氏。川島氏は福島県新地町に移り漁師として働く、震災後の漁業の現場からの発言だった。花部氏は伝説研究の視点から発言した。

最初は川島秀一氏による『「海の暮らしと再生」—福島県新地町も震災後のなりわい—』。古文書も人も流された被災地で過去の歴史を再構成することは聞き書きでしかできない。それが新地に呼ばれた理由だった。また、現在の問題—原発処理後に残る放射性物質を含んだ水の海洋放出、新たな人災を生む「水産改革」法案—について相談にのるという要請もあった。

実際に船に乗ってみるとさまざまな伝承が残っている。地震の際の沖出しをする方角、ジンクス。シラス漁では追いこむ際ロープの長さを変えていくが、両手を伸ばした長さで測る。その身体感覚も伝承された漁業技術だ。その他、ヨリモノは全戸で平等に分ける、他の船を手伝う、物々交換といった考え方が震災被害の中でも漁業を早く復活させる力になったのでないか。

震災後コミュニティの解体を嘆く声があったが、解体していない。海難事故の盆供養は「流船供養」と呼ばれ、地域では今でも行われている。供養記録の中に、家族が見つけれられるよう、ロープで自分の身体を船に縛った例が一件あったが、東日本大震災でも同じことがあった。これも伝承されたのだ。

漁師にとって災害は海のひとつの顔だ。災害を特化して考えるのではなく、海との関わりのなかで災害という顔を見せているのだと考える感覚が感じられる。

次は花部英雄氏による『災害と記憶』。浅間山噴火、名立崩れの伝承は体験者によるものではなく、噴火事故を視察に行った者が書いた随筆(根岸鎮衛『耳袋』)や、唯一生き残った人に聞いたと旅行者が書いた日記(橘南谿『東遊記』)が資料となって文芸化されたもの(滝沢対吉原作「浅間山噴火大和讃」、岡本綺堂「名立て崩れ」等)がもととなっている。名立町ではそこから町史が書かれ、後にそこに移り住んだ者が自分たちのアイデンティティとして伝えている。被災者や家族は地域に残らなかったのだ。

東日本大震災では聞く人がいて、語られ、語りの枠が出来上がっていく。震災の記憶は、時間の経過の中で起こっていることも含めて作られていく連続した流れだ。これが「集合的記憶」だ。

フランスの社会学者の中で災害や戦争を「集合的記憶」という面で捉えようとする動きがある(モーリス・アルヴェックス『集合的記憶』)。記憶は映像ではなく、言語によって構築したものと言う。

さらに集合的記憶の中に同化するためには同じような環境が必要だ。これが遺構だ。遺構があって初めてあの東日本大震災は大変だったとわかる。

伝説研究は信仰に還元するだけでなく、「集合的記憶」という考え方も大切だ。

【公開講演】2019年6月1日（土）

波照間 永吉氏 口承文芸としての琉球歌謡とその文字記録化

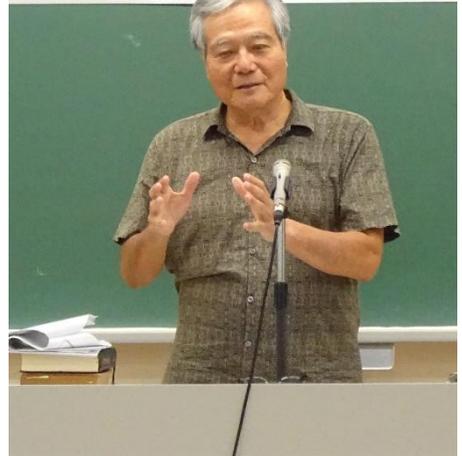
真下 厚(京都府)

当初の講演題目は「琉球文学と口頭伝承」であったが、当日は琉球語に拠る狭義の琉球文学の一つとされる琉球歌謡の文字記録化の問題に絞っての講演となった。

その内容はおおよそ次のようなものであった。琉球歌謡は奄美・沖縄・宮古・八重山の各地域、性格・内容や形式、歌唱・詠唱の場などの点において多様で、それらを体系的に整理・分類して把握するべく研究が進められた。琉球王国で記録に用いられた「番字」というのは平仮名のことと考えられよう。首里王府が1531年から1623年にかけて三回にわたって王府や沖縄本島及びその周辺の島で伝承されていた歌謡を記録し、編纂した『おもろさうし』は収載の歌謡をわずかに漢字を交えつつほとんどは平仮名によって記載している。その記載の仕方は歌唱されるそのままの完全なかたちのものから反復部や対句部の一部または全部を省略して記載するかたちのものまでさまざまな方法が採られている。こうしたオモロのなかから対句部と反復部との境界がなくなり、短詩形抒情詩的なオモロが生まれることによって、文字が関与することなく、琉歌という新たな歌が成立することになったと考えられる。宮古諸島の歌謡は琉球王国時代、アヤゴ部によって伝承されたと伝えられ、それが18世紀、宮古在番によって編纂された「宮古島旧記」に記録されている。その後、近代に入って伝承者自身による文字記録化や研究者による記録化がなされている。また、八重山も同様であるが、近年のトゥッパラーマ大会で歌われる歌詞が書いて作られているところは歌と文字との関わりの問題として注目される、と。

本講演で提示されたのは声の文芸と文字との関わりの問題である。伝承される歌は声のみによって伝えられてきた。しかし、ある場合には文字に記録されるようなこともあった。その際、歌謡は説話と異なって、音声化が可能ないように記述された。その歌はやがて文字で書いて生み出されるようになる。その場合、関与の仕方についても留意されねばならないだろう。こうした歌謡と文字との関わりは口承文芸の問題として重要であって、琉球歌謡にはその関わりのおもろささまざまな様相をみることができる。こうした新たな方向性の示された貴重な講演として拝聴した。

## 本口承文芸



福田 晃氏 「南島説話大成」の可能性—四十五年のフィールド調査の中で—

松本 孝三(大阪府)

福田晃氏のご講演は、まず若かりし国学院大学時代に柳田国男・折口信夫の学風に触れたことを述べる。それは氏の学問の原点であったといえよう。次いで柳田国男・折口信夫両氏と南島との関わりに言及する。氏は柳田国男の『口承文芸史考』の説く「神話学という学問は、日本でならば可能である」という言葉を評価しつつ、今日なお形骸化せず生き生きと伝承される南西諸島の昔話調査の実践を通して、柳田のそれとはおのずと異なる立ち位置からわが国の南西諸島における口承説話の全体像を追究し続けて来られた。その視

点と方向性として、神話伝承が祭祀の中で韻文伝承される歌謡として、一方その周縁において散文として伝承されることに注目する。そして、韻文伝承における外間守善氏を中心とする「おもをさうし」から『南島歌謡大成』に至る研究成果や、山下欣一氏の奄美諸島の民間巫女の神歌収集とその考察を高く評価され、それに準じたかたちで散文伝承としての「南島説話大成」の集大成の必要性を説かれるのである。

ところで、福田氏の南島説話のフィールド調査はすでに昭和46年に始まる。当日配布されたレジュメにその詳細が記されている。筆者も昭和49年の三大学合同（沖縄国際大学・大谷女子大学・立命館大学）による沖縄本島調査から参加しているが、その際我々に大きく立ちはだかったのは「言葉」の問題であった。福田氏はシマクチ（琉球方言）とヤマトグチ（本土方言）の違いは大きく、本土からの調査者は、口頭によって伝承される説話の収集作業と報告書作成における困難さに直面し、さらには沖縄国際大学の学生など、南島出身の調査者にとっても奄美地方、沖縄本島地方、宮古島地方、八重山地方のそれぞれの隔たりは大きいものがあつたと指摘する。筆者自身もそれを身を以て体験しており、毎夏の調査とまとめ、翻訳作業は相当にきついものがあつた。

さて、それらの口承説話調査の成果として多くの資料報告書が今日までに出されているが、福田氏は、最も重視すべきは方言による語りの再現を期するものであると主張する。その方法は、方言の語りを忠実に翻字し、共通語による対訳を試みること、さらに、口頭伝承世界について相当に精細な解説を行うことであるという。そして、それらの長年積み上げられてきた南島の膨大な資料群をまとめるべく「南島説話の大系・分類」が次に示されることになる。福田氏は南島説話について「神話」「伝説」「語り物」「昔話」「世間話」「史譚」にジャンル分けし、それぞれの観念・思想を示しつつ、これまでの先学等の研究成果に対する周到な考察の上に立って、次のような南島説話の分類私案を提示するのである。すなわち、A. 南島「神話」分類私案…(1)宇宙の起源、(2)神々の葛藤、(3)国土の起源、(4)人類の起源、(5)神の子・神の嫁、(6)文化の起源、B. 南島「伝説」分類私案…文化叙事伝説・自然説明伝説、C. 南島「昔話」分類私案…〈その一〉本格昔話（誕生奇瑞譚・異常婚姻譚・継子譚・兄弟譚・致福譚・厄難克服譚・動物援助譚・機知譚）、〈その二〉非本格昔話（因縁話・妖怪譚・史譚・笑話・鳥獣草木譚）、D. 南島「世間話」分類私案…〈その一〉神の靈異、〈その二〉妖怪の奇異、〈その三〉人間の異常、である。その各々について具体的な話柄を大部な別冊資料として提示されている。

今回のご講演の「南島説話大成」の壮大な分類私案と、その附録として提示された膨大な資料によって私たちは、福田氏のわが国の南西諸島における膨大に蓄積された昔話伝承全体の分類への大いなる熱意と今後への示唆を受け取ることとなる。福田氏は「叩き台としての試案」などとおっしゃるが、「試案」あるいは「私案」の域をすでに超えていると私には思われる。

福田氏によれば「南島説話大成」はいまだ手つかずの状態であるという。口頭伝承が最早南西諸島においても失われつつあるという状況の中で、それは急いで果たすべき課題であることを強調される。

## 【研究発表報告】6月2日(日)

### 第一会場 前半

佐藤 優(岩手県)

大島 万由子氏「学校の怪談と社会状況 ― 昭和期と平成期の比較を中心に ―」

松谷みよ子氏や常光徹氏が問題を提起した「学校の怪談」、中でも「トイレ」という場合は、研究上注目されてきた。だが、近年のトイレは、二者が論じていた「薄暗く不衛生な場」とは異なるイメージを私たちは抱くだろう。

本発表は、こうした私たちのトイレに対する意識の変化を考察した上で、映画やアニメなどに登場する「トイレの花子さん」像の変遷を分析し、昭和から現在まで「花子さん」がどうイメージされてきたのかを意欲的に論じていた。

発表内容としては、映画などで提示された「花子さん」の容姿が、実際各地の学校で話されている怪異話でのそれと共通する部分が見られると指摘されていた。ただ、オーラルの話の場合、映画などのイメージをそのまま受容するのではなく、学校のトイレの変化に合わせて聞き手が受け止めやすい形に変容していると結論づけた。

日常生活が刻々と変化する現在、ネットなどの多様な情報メディアは、私たちの暮らしに大きな影響を与えてきた。「花子さん」像もこうした影響下にあることは首肯できる。ただ、発表の中で指摘されていた「花子さん」の髪型は、なぜ「おかっぱ」が多いのか。現在、この髪型の女の子を見かけることはまれである。今回の発表は、変化についての指摘が多数を占めていた。そこから一歩進めて、現代社会とは不釣り合いだが変わらない容姿の部分についても分析することで、現代における「花子さん」像の本質的な部分を描き出せると感じた。

#### 富樫 晃氏「八百比丘尼伝説の成立について — 江戸初期の若狭小浜を中心に —」

八百比丘尼伝説は、全国各地に分布し、各地域において特有の伝承背景を持つ。こうした多様性が認められるこの伝説について、大島建彦氏の「八百比丘尼」の伝説（『日本の昔話と伝説』所収）は、近年における包括的な研究であり、資料一覧と合わせて多くの知見を私たちに示してくれている。

今回の富樫氏の発表は、大島氏の研究を受けてこの伝説の成立と展開を考察したものであったといえる。富樫氏の研究方法は、八百比丘尼と若狭小浜の関連性について、現在八百比丘尼入定の地とされる空印寺とこの寺院建立以前に八百比丘尼を祀っていたとされる神明宮に関する文献資料の詳細な分析を基盤とするものであった。

具体的な発表内容は、小浜藩主酒井家の菩提寺空印寺と酒井家から保護をうけている神明宮が、近世以降この伝説の管理者となった。しかし、藩の財政難を受けて、従来の格式を保持するため、多方面への勧進をおこなう必要性に迫られた。そこで両寺社は、八百比丘尼伝説を取りこんだ縁起を作成し、全国規模で勧進をした結果、この伝説が広範囲に展開していったと考察されている。

発表では、新潟県と群馬県の3事例を出されていたが、いずれも文献に拠るものであった。各地域における富樫氏の調査資料を提示することで、文献だけでは見えてこない伝承実態の特徴を示すことができ、従来の研究をより深化させることができるといえる。今後の研究が俟たれる詳細な発表であった。

#### 西座 理恵氏「外れない肉付き面のモチーフ — 酒吞童子の伝説を中心に —」

昔話や伝説は、古典文学として伝わっている作品と多くの類似点がこれまで指摘されてきた。こうした研究視角は、「お伽草子」研究の分野で徳田和夫氏の研究など多くの蓄積がある。

西座氏の一連の研究は、こうした研究の流れに位置づけられるものであろう。今回の発表では、「肉付き面」型の説話として、赤木文庫旧蔵『大江山酒呑童子』（『室町時代物語大成』補遺1所収）と伝説としての「酒呑童子」のモチーフ比較をおこない、伝説の伝播に瞽女が関係していることを指摘していた。また、山形県で伝承されている「酒呑童子」伝説を取り上げ、冶金の技術に長けていた人々が、この地における伝

説の流布に関与していたことなどを論じていた。

聖などの宗教者や西座氏も指摘していた瞽女や鍛冶屋などの芸能・職能民は、伝説の伝播者としてこれまでしばしば指摘されてきた。もちろんこうした人々による伝播も当然認められることだろう。しかし、今回の発表は、主に近世期における伝説の伝播や受容に関する内容であった。様々な寺社参詣がおこなわれ、多様な階層の人々が他地域へ出かけていけるようになった時代、それが前代とは異なる近世の大きな特徴の一つであろう。とするなら、伝説の伝播も西座氏が取り上げていた「道中記」などを媒体として、百姓や町人などの人々が担っていたとも考えられよう。伝説の広がりを考える上で、多様な史資料の分析が大きな意味を持つことを学べた発表であった。

## 第一会場 後半

### 飯倉 義之(東京都)

研究発表第一会場の後半は三田加奈氏(國學院大學・院)、永島大輝氏(昔話伝説研究会)、菊地暁氏(京都大学)の三人が登壇した。

三田加奈氏の発表「『鬼三太残齡記』とその周辺——『清悦物語』と比較して——」は、現在東北大学ほか数か所で所蔵されている、源義経の奥州下りから衣川での最期、ならびに語り手・清悦もしくは常陸坊海尊の逃亡及び生存を主題とする『鬼三太残齡記』についての考察であった。柳田國男は同書を、その主題の一致から『清悦物語』の異本と位置づけ、東北地方の芸能である奥浄瑠璃との連続性を指摘した。

三田氏も二書の密接な関係は認めたくて、『鬼三太残齡記』は『清悦物語』の三倍近くの分量があること、義経が蝦夷が千島に脱出する北行伝説に接続すること、衣川までの道程や同行する家臣団が大きく異なることに注目し、前者を後者の異本・別本ではなく、中心とする主題のまったく異なる別系統の伝本であるとの見解を示した。『鬼三太残齡記』の特徴は、湯殿山の真言宗系の先達の活躍と、義経には越後街道を抜けて衣川に向かわせるなど会津を強く印象づける記述にあるとし、こうした主題の違いは江戸初期の湯殿山と羽黒山の勢力争いに起因するものかもしれないという見解を示した。

続く永島氏は、クビキレウマ・クビナシウマ等とよばれる「特定の日時を定めて首のない馬(まれに首だけの馬・首のない牛)が決まった道を走る(のでその日はそこに行ってはいけない/家から出てはいけない)」という怪異・妖怪伝承について調査研究を重ねてきた。この度の発表「馬の首が飛ぶ日についての一考察」は、三宅島の神着(かみつぎ)集落の、馬娘嫁娶譚の結果殺された馬の首が正月二十四日の夜に村を飛び回るといふ「首様(コウロベサマ)」伝承の現在を、フィールド調査した報告と考察であった。

この伝承は柳田國男の「妖怪名彙」、國學院大學民俗学研究会の報告書『民俗探訪』昭和三十年月号にも報告があり、日忌習俗として地域で伝えられていた。が、現在は日忌の年中行事は消滅し、首様の伝承も途絶えてしまっていることが確認できた。しかし発表者は、首様の走る場所や近い日付に個人的な怪異を体験したという世間話が再生産されていることから、共同体の成員が共通に抱いていた怪異が途絶えて

も、その怪異の起こる時間・場所は個人化されて継承されているのではないかという視座の可能性について、示唆した。

菊地氏は「文化資源としての〈こども風土記〉——『北白川こども風土記』（1959）を中心に——」と題して、ふんだんな画像・映像を提供しつつ発表をされた。

柳田國男が一九四一年に新聞連載し、その後に単行本化・ラジオドラマ化・演劇化された『こども風土記』はこどもの生活をみすえた民俗誌をエッセイ風に読みやすく書き出した連載であった。それが戦時下から戦後にかけての時期、生活綴り方運動や戦時下の郷土教育・植民地での皇民化教育・戦後の民主化教育の中で日本各地の教育実践のモデルとしてとりあげられるようになった。その中でも本発表が取り上げる、京都市立北白川小学校『北白川こども風土記』（一九五九）は出色の出来であり、その成立過程を脚色して映画化を果たすほどであった。

この『北白川こども風土記』の成立について菊地氏は、石器時代からの長い歴史・近世の白川女などに代表される近郊農村化（通商圏に組み込まれた農村）された立地・近代に開発された住宅地に住んだ京都大学の大学教員が同地域のPTAであったという条件を指摘、同時代において他地域の教員より「あんたのどこやからできたのや」という例外的な実践という理解が定着した過程を整理した上で、なおかつこの実践を普遍的な共通の問題につなげようとしていた指導教員の視点に注目し、現代における地域文化の掘り起こしと、小学校ネットワークへの研究者の支援の必要性を提唱された。

なお、初日御講演者の福田晃氏が本会場のすべての発表を最前列で聴講され、学界の今後を担う発表者全員に指導と激励と期待のお言葉を寄せてくださっていたことが、強く印象に残った。研究発表にも一般聴講者の方が多く参加され、活気ある沖縄大会であった。

## 第二会場 前半

間宮 史子(神奈川県)

ウメトバエワ・カリマン氏「アクン技芸の音楽構造の分析—新資料から見直すクルグズとカザフスタンの語り物 (Oral Narrative) —」

アクンは、楽器を弾きながら歌い話芸を行う芸能者で、ソ連成立（1917年）以前には、聴衆を楽しませるだけでなく、社会で起きていることを歌に反映させ、「庶民の声」と呼ばれたという。かつては旧ソ連の様々な国に存在していたが、現在はクルグズ（ロシア語の発音ではキルギス）とカザフスタンにしか残っていない。そのアクンの力が最も現れる場が、二人以上のアクンが即興の歌で競い合うアイトゥシュ（クルグズ）／アイトゥス（カザフスタン）だという。これらの説明のあと、両国におけるアクン技芸の現状として、アイトゥシュ／アイトゥスの復興の様子が報告された。若いアクンが育成されている点は両国で共通しているが、カザフスタンは国レベルでアクン技芸を保護しているのに対し、クルグズは消極的で経済的支援が少ないという。アクン技芸の音楽構造の分析では、アクンの詩の音節数がクルグズとカザフスタンで異なること、それはアクンの歌の元となっている詩に由来することが述べられた。

アクン技芸について初めて聞く私には、たとえば、カザフスタンのアイトゥスのテーマが「国語や、宗教、国の独立25周年記念日、愛国心、日常生活など直接庶民に関わっている問題」で禁止された時期もあるこ

と、大学でジャーナリズム専攻のアクンが多いことなど、興味深かったのだが、カリマン氏はこの研究の端緒についてとことろいってよいだろうか、今後さらに調査・研究が進められることを期待したいと思う。

## 澤井 真代氏 『おもろさうし』の「つゝ」

琉球王府の宮廷儀礼歌謡集『おもろさうし』（16～17世紀に3回にわたり編纂）には、国王等権力者の男性を、女性が「オナリ神」として守護することが謡われたオモロが多くあり、『おもろさうし』におけるオモロの検討により、沖縄の信仰の世界を考察するうえでの重要な視点を得られるという。『おもろさうし』に記される「つゝ」という言葉は、単独で出る「つゝ」は2例だが、表記と語釈に幅がある。まず、それらの「つゝ」について、『おもろさうし』における用例・語釈を、先行研究をふまえて丁寧に整理し、「つゝ」は呪的な力をもつ言葉ではないか、とする。さらに、琉球歌謡の「つゝ」の例を検討し、「つゝ」は「霊力のある言葉」である可能性があり、力のつりあう二者が、何らかの事を成すために「相手・つほこ」になったときに取り交わされる、と指摘する。そして、琉球列島の神役・神・霊力は、あるものがあるものに憑かる、憑依の関係であり、あるものとあるものの力がつりあうこと、つりあった力が向き合う中から何らかのはたらきが生み出されること、と解釈する。

この発表に対して、『校本おもろさうし』を使ったが、『定本おもろさうし』を使わなかったのはなぜか、「つゝ」と「つち」が区別され書き分けられていたことを考えると、両者を同じとしてよいか、といった質問が出された。今後の精査を経て、琉球歌謡の読み解きや民俗宗教文化の分析に資する新しい視点が提示されることが期待される。

## 鶴野 祐介氏 「ろう学校における手話を用いた民話絵本の読み語り活動—説話伝承とダイバーシティ—」

「口承文芸＝音声言語によって伝達される文芸」とすることで、私たちは「音声なき声」による伝承を除外していたのか、と目を開かされる思いだった。鶴野氏がこのテーマに取り組むきっかけとなったのは、英国スコットランドでの経験、ひとつは「ダイバーシティ（文化的多様性）」と「文化的エコロジー」という考え方、もうひとつはスコットランドの聾者社会におけるストーリーテリングの研究との出会いである。まず、「口承文芸」を「音声なき声」による「身体的言語」としての「手話言語」を含む「身体的一口頭の伝承」として再措定すること、ろう者社会に対する意識の変革がダイバーシティを尊重する社会の実現に資すること、そこに手話による説話伝承の役割があることが示された。そして、語りの文化と視覚的メディア、手話とろう教育の歴史の概観の後、奈良県立ろう学校幼稚部・小学部における手話による絵本の読み語り活動の実践が報告された。読み語りには昔話絵本が重点的に使用されるといい、民間説話が題材に用いられることの意義が考察された。

質疑応答も興味深く、「昔話の様式性と手話表現との相性の良さ」の意味について、鶴野氏はリュティの様式論を挙げ、登場人物の感情ではなく行為を語っていく昔話の語り方が手話言語にも適していると述べた。耳で聞いてわかりやすい簡潔な語り口をもつ昔話が手話と親和性があるだろうことはうなずける。手話言語と音声言語による昔話の語りを、ろう者と聴者が同じ場で楽しむことができれば、すてきだと思う。

## 第二会場 後半

## 北原モコットナウシ次郎太 氏「アイヌの感生説話－アイヌ社会におけるジェンダー認識形成との関わりを考える－」

「北海道南西部に見られる英雄の出生譚をとりあげ、これを世界各地に見られる感生説話・卵生説話の一つに位置づける」とともに、「こうした説話がアイヌ社会のジェンダー認識形成と維持に与えてきた影響」について論じるというのが、北原氏の今回の発表テーマである。発表では、まず古代中国の事例を確認した上で、古代日本のアメノヒボコ伝承や奄美における伝承などを踏まえ、アイヌの感生説話の事例を紹介し、女性に子を孕ませるのは、日神だけではなくさまざまな神が関与していることを指摘する。そしてそこでは、女性が知らないうちに懐妊し、神の世界を追われたり、家を追われて一人で出産を体験したりするさまが語られ、それら処女母神が生む子は男性英雄に限られると指摘する。

アイヌ社会には厳格なジェンダー役割があることが近代以降の民族誌には記されているが、これには記述者の側のジェンダーバイアスが影響している場合もあるだろうとみなした上で、北原氏は、アイヌでは重要な神が女性とされることもある半面、夫婦神の場合、男神が優位に置かれる傾向があることを指摘する。そうした男性優位な社会はいつから形成されたのかと考えると、「非常に古い時代から男性優位の社会が作られていた可能性は高いが、ジェンダー規範を崩し、越境することに対しては相対的に寛容な社会」だった可能性があるというところに研究の可能性を見いだしていた。

## 奥田統己氏「アイヌ語の韻律の技法と類型」

アイヌ語の韻文（英雄叙事詩、神謡、叙情歌など）において、その表現はどのような技法と表現を持っているかということに、「音」という面から徹底的にこだわった研究発表であった。

具体的に言うと、「母音・子音」の配置はどこまで規則的になされ、そこに技法といったものが見られるかという問題が取りあげられる。たとえば、頭韻や脚韻といった表現がアイヌの神謡に見いだせるとして、それが偶然ではなく規則的・技法的であるというためには、どのような道筋を立てて考えればいいのかということに、奥田氏はこだわり続ける。たとえば実際の「音」の組み合わせに基づいて確率として考えると、「4行の詩句を組み立てるとき、同じ母音を一度も繰り返さないほうが難しい」ということになる。その上で、1行5音節の神謡のなかに4音節の行が混じることについて具体的な検討を行い、日本語の韻律の場合、「音節数志向」が支配的であるのに対して、アイヌ語の詩歌の場合、「音節数志向」と「アクセント志向」とが共存することを指摘する。そして、「音節数志向」に加えて「アクセント志向」の韻律をもつところにアイヌ口頭文芸を特徴づける技法が見いだせるかもしれないという今後の研究の可能性を奥田氏は見いだしていくのである。

ジャンルによる違い、あるいは地方ごとのあり方など、今後も深められてゆくことになるだろうと思う。

## 【シンポジウム】

### 危機言語の口承文芸－沖繩・奄美・アイヌの伝承と記録

繁原 央(愛知県)

中川裕氏(千葉大学)の司会のもと、表題のテーマでシンポジウムが行われた。趣旨説明のあと、遠藤志保

氏(北海道博物館)が「アイヌ語・アイヌ口承文芸アーカイブスの現状と課題」、酒井正子氏(川村学園女子大学)が「奄美のシマ言葉・島唄の継承と、ウタを生み出す力」、西岡敏氏(沖縄国際大学)が「口承文芸のテキストと文法注釈」、熊野谷葉子氏(慶応義塾大学)がコメントという設定であった。

まず司会から副題の「アイヌ・奄美・沖縄の口承文芸の音声・映像の活用について」を含めて、どういう趣旨でのシンポジウムかをコーディネーターの狩俣恵一氏(沖縄国際大学)に説明するよう促された。

狩俣氏が「琉球は王国を築いて独自の文化を持ち、おもろそうし・琉歌・組踊りが文字にも記録されてきた。奄美は薩摩に直接支配されたためか、島唄についても独特の高音でうたうのに対して、沖縄は高音を好まないという違いがある。また、アイヌは独立した国を持たなかったし、アイヌ語は日本語と異なる言語であるのに対して、琉球語は日本語と姉妹語であるという違いがある。このように各々が独自の世界観を持っていて異なるが、口承文芸は三者に深い関わりが認められる。言語面では危機言語と言われるアイヌ語・琉球語の口承文芸を対象に、録音・映像資料の活用と継承の在り方について議論したい」と述べられた。

沖縄とアイヌを対比させるのは、口承文芸のみならず両者の文化的類似がうかがえるので、すばらしい企画であり、口承文芸としては奄美のシマ唄が有名なので、どう関わるか期待される場所があった。

アイヌ語でのテキストを作る仕事をしてきた遠藤志保氏は「危機言語としてのアイヌ語の現状は、母語話者はほとんどいないし、日常生活では挨拶くらいにしか使われていない。祭祀の場以外には、アイヌ語を学ぶ目的での使用がほとんどなので、アイヌ語やアイヌの習俗・技術などが伝承されなくなっている。だからこそ一定量存在する言語資料は重要で、アイヌ語学習の素材としての口承文芸はテキスト化されている。ただ、アイヌ語学習は自分のためでしかなく、使う機会はない」とパワーポイントを使って丁寧に説明され、さらに、「アーカイブ資料は物語が多く歌が少ない特徴があるが、デジタルアーカイブは増えている。聞き起こしや和訳によるテキスト作成作業は、アイヌ語のトレーニングとしても貴重な機会となっている。今後も人材育成を続け一般に広くアイヌ語を習得する人を増やしたい」と結ばれた。

二人目の酒井正子氏は、奄美諸島の言語状況とシマ言葉継承の試みを、方言の禁止から尊重へという変遷を踏まえたうえで、現在、シマ言葉を話せる層が減少しつつあることを指摘し、その一方で「島唄をうたう若手唄者が台頭して、民謡大賞受賞者に二十代三十代の人が増えている」という。そして、先年亡くなった唄者・築地俊造の提言と実践を紹介し、「新たなウタを生み出す試みとして、自分の言葉でうたうことで唄に真実味を取り戻すことができる」と述べられ、若手唄者の即興的な掛け合いを映像で見せてくれた。

三人目の西岡敏氏は専門の言語学の立場から、琉球における原話による口承文芸の記録がすでに音声映像化も文字化もされ、研究・教育への応用がされているという。その上で、具体的にどのように記録・編集されているか十四の資料を提示し、七つのパターンがあるとされる。そこから縦書きか横書きかの問題と、語の切り方と文法注釈(グロス)の付与の問題とを指摘され、「昨今は若年層を中心に、琉球語諸方言を理解しない人々が増えているので、言語学者は日常語の分析を踏まえた上で、口承文芸のテキストに文法注釈を加えることが重要だ」と論ぜられた。

三者の報告を受けて、熊野谷葉子氏が「消滅言語の問題は言語保存に関わっていて新たに学ぶ必要があるという点で共通している。消滅するという危機意識から口承文芸を収集したわけだが、今はそれをどう伝えるかという段階にきている。昔話も唄の場もなくなりつつあるとすると、アーカイブ化が必要なのだが、危機言語の方が先に消滅してしまうだろうか」とコメントされた。

このコメントに対して、遠藤氏は「アイヌのデータ公開について目録を作り、教材として公開しているが利用率は低い」。酒井氏は「島唄を七十代と二、三十代は踊れるが、四、五十代は踊れない、踊るのはよくないと思っている」。西岡氏は「言語学の問題として楽しむ教育とグロスの統一は違うので、用途別の表記が必要」と答えた。

その後の討論では沖縄とアイヌの絵本の読み聞かせ交流の話題などが出たが省略する。  
沖縄とアイヌの状況は違いを越えた独自の動きが見えて興味深いものがあった。



## 国際口承文芸学会 (ISFNR) 第 18 回大会のお知らせ

国際口承文芸学会 (International Society for Folk Narrative Research; 略称 ISFNR) の第 18 回大会が 2020 年 6 月 21 日～26 日、クロアチア共和国のザグレブで開催されます。

民族学・民俗学研究所とザグレブ大学の主催で、大会総合テーマは "Encountering emotions in folk narrative and folklife" です。

研究発表申込期日は 2019 年 10 月 14 日です。詳細については、以下のサイトをご覧ください。

<http://www.isfnr.org/isfnrcongress/>

---

### 事務局便り

#### ○寄贈書籍(2019 年 2 月以降拝受)

- ・国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 214～216 集 2019 年 3 月
- ・国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館要覧』2019 年度版
- ・国立民族学博物館『国立民族学博物館開館 40 周年記念事業報告 みんなぱく 2017』 2019 年 3 月

#### ○日本口承文芸学会事務局

〒168-8508 東京都杉並区大宮 2 - 19 - 1 高千穂大学人間科学部 立石展大研究室

Tel: 03-3317-4077 (内線 3421) Fax: 03-3313-9034

E-mail: [info@ko-sho.org](mailto:info@ko-sho.org)

---

#### 日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。